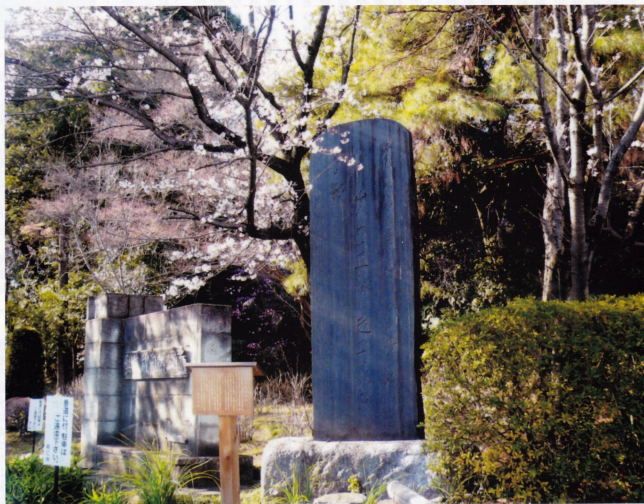


御土はんのう

第28号



蔵原伸二郎 詩碑 (昭和41年9月建立 飯能市観光協会)

飯能市は緑と清流に育まれた風光明媚な地域で、古くから文人墨客が訪れ、多くの足跡を残している。天覧山周辺には文学碑が多く建立されており、天覧山の登り口に大きく立派な碑がある。蔵原伸二郎詩集『岩魚』巻頭の「めぎつね」の一節が刻まれている。

目次

- ◆歴史に学ぶ私の歴史観・・・・・・・・吉田 靖 2
- ◆武田氏一族のゆかりの地を訪ねて・・・浅見初枝 4
- ◆二月の雪に想う・・・・・・・・・・・・新井五助 5
- ◆浅草観音の生地 岩井堂・・・・・・・・入子助蔵 6
- ◆古飯能焼と陶工としてのイッチン描きの検証
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・岸 道生 7
- ◆蔵原伸二郎・若山牧水の歌碑撮影・・・大野邦弘 8

歴史に学ぶ私の歴史観

吉田 靖

柄にもなく小生、幾つかの公民館で郷土史講座を担当してきた。そこで特に感じたのは多くの受講者が「歴史」とは人類社会の足跡である、「歴史」とは人類社会の対峙である」との模範的な考えをお持ちの方々に、歴史はいつから始まるのかとなると若干の思い違いがある、という点だ。すなわち歴史というのはい「その社会に人が住んだ時から始まる」との考え方である。そんなのどうだつていいじゃないか、と笑い飛ばされそうだが、実はこの歴史の原点を誤ると、その社会にとり大きな禍根を残すことにもなりかねない大きな問題をほらんでいって考えられる。確かに一般的なには人類史も古代史もみんなごっちゃに考えてもいいし、歴史がいつの時代から始まるなんて考えなくてもいいが、多少なりとも歴史を学ぼうとするなら「歴史の持つ意味」をちよっとだけ深く知る必要があるのではないかと、そんな気がしてならないのである。と言ってもし小生に深い知識があるわけではない。そこで私は津田左右吉や井上光貞など歴史学者の言葉を借りながら小生なりの考え方をまとめてみた。

歴史とはいつの時代からを言うの

か。一般には前述のように、その地域に人が住んだ時から始まると思われている。しかし史学ではそうはとらえていない。人が住んでいたら歴史……となると、身近な例でみると飯能市内では各地の埋蔵遺物の発掘調査で五千年前、七千年前の石器、土器、住居史が出土しており、その当時から人が住んでいたことが証明されている。すると「飯能の歴史五千年」とか「七千年」と言うことになる。しかしそうは言わない。お隣りの日高市では台地区から一万年前の石器が出土し、一万年前にすでに人が居た証しとなっている。だからといって「日高一万年の歴史」とは言わない。もう一つ、極端な例だが中国では三十万年前の猿から人間への進化の課程を示す人骨が出土しているが、それによって「中国三十万年前の歴史」とは言わない。ほかにも中国には各地から二万年前後の遺跡多数が出土しているが「中国二万年の歴史」とは言わない。通常は「中国五千年の歴史」とか四千年の歴史とされているのは「承知のとおり。朝鮮（韓国）の場合も同じで何万年前の遺跡はあつても「朝鮮一万年の歴史」とは言わない。朝鮮一万年の歴史」が普通だろう。そこで中国四千年の歴史とか、朝鮮三千年の歴史というからか、なぜ四千年であり三千年なのか、そこには自ずから理由がなければならない。 「歴史」はそれがない要件が備わっていないなければならないのである。

歴史の要件とはどのようなものか。それを知るには①歴史の初めはいつか②「歴史」という文字の持つ意味③日本の文字の発生はいつか、この三点を吟味しなければならない、と考えている。三つの要素とはどのようなものか。その一つ一つを見てみよう。

歴史：その意味するもの

▼第一点：歴史はいつから始まるのか。

学問的にはその地域に人が住んでいた時点からではなく、その地域に支配者と被支配者が生まれた時点からとされている。すなわちその地域に王様とか皇帝とかが現れ、人民を支配する。その社会は支配する者とされる者として構成される。いわゆる国の誕生である。そこからが歴史の初めとなるわけである。いわゆる「日本」の歴史、いわゆる建国はいつから始まったのか。史学会の定説では約千五百年ほど前の「五世紀」とされている。

それ以前は歴史でないといすれば何という時代なのか。史学では「考古学時代」とか「先史時代」と言っている。（ほかには原始共同体社会とか石器時代、縄文時代、古墳時代、弥生時代といった分類法もある。神代との表現もあるが、いかがなものか）

▼第二点：「歴史」の文字が教えられるもの

「歴史」という文字はオオダレが基本。オオダレは断崖を意味している。

飯能でいえば阿須のアカバッケのような崖である。したがって崖という字事態もオオダレが基本となっており、「険しい」とか「険しい」を意味する。だから「険しい」もオオダレから始まる。オオダレを人に当てはめると病気になるなど「険しい」事態に遭遇した場合を言う。したがって病という文字もオオダレ、すなわちやまいだれから始まる。これを社会に当てはめると戦国時代のような険しい時代を指している。

そして「林」。これは武田信玄の風林火山で知られるように「静かなならは江戸時代のような大戦のない平穏な時代を指す。そして「止」は険しい時代、平穏な時代といった各時代をよく正視するという意味である。そして「史」は「ふみ」。すなわち文章のこと。結局、歴史とは事実あつた様々な出来事が文章によって裏打ちされていること、という意味になる。

▼第三点：日本の文字が生まれたのはいつか。

今から千七百年あまり前、日本

には那馬台国(やまたいこく)という独立国家があり、卑弥呼(ひみこ)という女王がいた。このことはマスコミでもしばしば大きく取り上げられており、その存在は一般にもよく知られている。なのにヤマトイ国や女王ヒミコは日本の歴史にはなっていない。何故かそれはその存在を記した文字が無いからである。文字がないのなら那馬台国とか卑弥呼という漢字文字がなぜあるのか、その疑問も湧くが、日本国内にはそうした文字は全く見つかっていない。ところが中国の古書に発見されたのである。古代中国の歴史書「魏志倭人伝」の中に「倭(当時日本という文字はなく、ワと呼ばれていた)のヤマトイ国の女王ヒミコの使者が魏王に謁見した」などと書かれていたのである。使者は魏王に土産物を進呈したが、親書を差し出したという記述はない。日本にはまだ文字が無い時代だったからヒミコ女王からの親書がなかったのは当然。そこで魏王は使者の口から「那馬台国」「卑弥呼」という漢字を当てて史書に書いたものと察せられる。そして魏王は「使者に金印や鏡などを贈って卑弥呼を那馬台国の女王と正式に認証した」というようなことが書かれていたのである。

この中国の史書によって初めて二、三世紀の日本の女王ヒミコが国があったことが証明されたわけだ。しかし当時日本には文字がなかったで、国内には記録が残っていない。だからヤマトイコクのみは日本の歴史の仲間入りができず、今もって考古学の時代、先史時代におかれていた。二千六百年どころか、たった千七百年前にも文字がなかった事実が歴史学者たちによって明らかにされたのである。古代大和朝廷が漢字を日本の文字とすることを決めたというのが定説になっている。その後には片仮名、平仮名を考案、読みやすくなり、深い日本の文字ができたのである。日本の文字の完成は同時に時代を文章化するという「歴史」の確立に役立つことになったのである。

ではなぜ文字の無かった二千六百年前ごろにジナム、スイゼイ、アンネイ、イトクといった漢字の歴代天皇名があるのか。それは奈良時代の和銅五年(七一)に出版された古事記や、その八年後の日本書紀といった我が国初の史書、国造り神話のなかで創作されたものという説もある。

歴史の頭に「履」を乗せると「履歴書」となるが、履歴書は個人の足跡を記すもので「こう書けば箔が付く」といっても決してウソを書いたり事実をゆがめて書いてはいけないうことになっている。歴史は本来許されないはずが、履歴書はバレやすいのに対し、歴史は国の歩みである関係から、史書に間違いやウソがあったにしても一般国民はそれを見抜く術をもたない。たとえ術はあったにしても、それを口にするれば異端視されるばかりか、場合によれば弾劾されてしまう。

国民が不幸に陥るような、そんな過ちを繰り返してはならない。だからこそ歴史は正しく認識され正しく記されなければならないといえる。

そこへいくと民主主義社会は有難い。嘘は「ウソ」と言えるし、「歴史を意識的に曲解するな」とも言える。そんな有難さを感じ今日この頃だが、昔のように本當の事が言えない社会が再来しないことを切に願ってやまない。

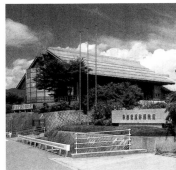
(副会長)

武田氏一族のゆかりの地を訪ねて
浅見初枝

飯能郷土史研究会の八月例会は、甲斐国武田氏一族ゆかりの地を訪ねることになった。

八月二十二日八時に郷土館をバスで出発し、飯能駅南口を二十一人の参加者で山梨県へ向った。

の釈迦堂パーキングエリアの隣にある釈迦堂博物館であった。釈迦堂遺跡群は昭和五十五年二月八日から翌五十六年十一月十五日まで、中央自動車道建設に先立って発掘調査されたもので、二万平方メートルの広大な場所には大きく三つの集落があったと考えられている。調査の結果、先土器時代、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の住居や墓、多数の土器、石器などが発見され特に縄文時代のものが豊富なのだそうである。そのなかで土偶は一、一六個出土していて数は全国一とのことである。立体的表現の土偶の大きさは二・三〜二五センチくらい。妊婦のような姿をしていて、顔は赤ちゃんのような左右対象のかわいらしいものであったがバラバラに毀されて発見されたそう。丈夫な赤ちゃんが生まれるようだと子供がケガをしなのおまじない(土偶を身替り)とか豊作を願って毀したなどの説がある。土偶のほかにはめずらしい土器や二千五百年間続いたといわれている縄文時代の暮しの様子や道具なども展示されていた。



●釈迦堂博物館
最初に見学したのは、中央高速道



●浅間神社

次に甲斐の國一宮浅間神社に行き、
 神宮の古谷さんから説明を受けた。
 古来あさまという言葉があった、火
 を噴くものを畏れ鎮まっていたと
 いう意味があり、漢字伝来のあと
 この字を当てたらしい。

木花開耶姫命を御祭神としている。
 武田氏の戦勝祈願の神社で、この神
 社の特殊神事として大神幸祭とい
 う川除祭があり、神社を出発点とし
 甲斐二宮、三宮と合流して、釜無川
 の信玄堤まで、「ソコダイ、ソコダイ」
 の掛け声で、片道二十四キロの
 行程を神輿を練る水防祭が毎年四月
 に今日まで続けられている。神輿も
 立派なものであった。

また神社の境内に夫婦梅という二
 花相寄って一類を結実するめずらしい
 神木があり、この実を食すると子
 室に恵まれること言い伝えられている。
 そのようなことから、古来山火鎮
 護、農業、酒造の守護神、婚姻、子
 授安産の神として崇敬をあつめてい

●ぶどうの国文化館・大善寺・景德院

昼食を取り、午後はぶどうの国文
 化館でぶどう酒ができるまでを見学
 し、続いて大善寺へ行き、国宝の華
 師堂で華師如来や十二神将などの諸
 仏を拝観し、武田勝頼が織田、徳川
 軍に追われてきたのを匿い「勝頼滅
 亡記」を著した理慶尼の墓の前を通り
 、蓬莱庭園を見学した。続いて武
 田家終焉の地、景德院へ行き武田家
 の位牌や遺品を拝み、武田一族の墓
 や勝頼親子が自刃した生害石を見学
 した。思ったより小さく哀れさを強
 くした。武田家家臣が敵兵千人を切
 り、川が三日間紅に変わった故に
 ながら山を下った。この寺は戦いに勝
 った徳川家康が武田一族の冥福を
 祈るため建立したものだという。

重い気分を払拭するのに最適で、
 最後の見学場所はメルシャン勝沼ワ
 イナウリーであった。ワイン工場の見
 学と試飲のワインに舌鼓を打つ。七
 時頃飯能へ戻った。

山梨県は数回行ったことがあるが、
 ブドウ狩り、水晶の観望堂、恵林寺な
 どの観光であった。釈迦堂、パーキン
 グはのびも通過する場所であった。
 武田氏の隆盛と滅亡にふれ、武田信
 玄といふ武将にさらに興味を覚えたし
 う、木花開耶姫命は皇室の始祖大御
 母であることなどを知り、勉強にな
 るよい見学会であった。

(会員)

二月の雪に想う

新井五助

「飯能にもスキー場があった。そ
 して河原にはスケート場もあった」
 と話題を投げかけると若い子供達は
 「ウッソ」と言い、大方の大人も
 半信半疑、地球温暖化が叫ばれてい
 る今日この頃無理からぬ事かと思
 わない。今年の冬も暖冬、小節の正月
 を過ごすうち二月に入り久々の降雪
 矢張り異常気象かと思われた。想
 い起せば例の二・二六事件は昭和十
 一年のこと、年配の方には決起した
 急進派に関係した人も直接見聞の方
 も居られると聞く。当時は冬となれ
 ば必ずという降雪、朝早くからの雪
 掃き、雪道を歩いての通学、雪合戦
 や竹を割って作った手製真似事のス
 キーや楢遊びが日常だった。

「奥武蔵スキー場」は現在の国道
 二九九号、正丸トンネルの手前を右
 折する山道を登った頂上、苜場坂
 の北側(旧大柗村の茅草原斜面)に
 作られたもの、武蔵野電鉄が「東京
 に一番近いスキー場」の謳い文句で
 宣伝、秩父との自動車道路「正丸峠
 新道」開通(昭和十一年)、統一
 のパンガローや厚生道場建設との一
 貫計画であったと思われる。

苜場坂時は名栗村合併以前の飯能
 市最高地点ツツジ山(八七九メー
 ル)の西に近い場所、さらに北側の
 山林地帯でかなりの積雪、スキー場

適地であつたらう。

当時の新聞記事を紹介しよう。

昭和十一年二月六日、東京日日新聞
 「スキーヤー二百名押出す」

「飯能、豊岡両地方では四日正午よ
 り振り出した猛吹雪は夕刻頃には早
 くも積雪量計センチ余に達し飯能、
 青梅、飯能大蔵平、飯能坂戸、飯
 能川越、飯能入間、飯能名栗等
 のバスは何処も午後三時頃には運休
 また武蔵野電車、八高線列車も夜に
 入ってダイヤは減車々々となり、八
 高線、武蔵野線は各電車、列車とも
 卅分乃至一時間半ぐらいの延着発で
 あった。この雪は奥武蔵スキー場
 には積雪五十五センチでスキーで絶妙
 のコンディションとなったので五日
 朝来東京市内スキーヤー約二百名位
 武蔵野電車で乗り込み快走している」

戦前の少年時代、吾野の山村に生
 まれ育った私達とすればスキーやス
 ケートは本や新聞で見たり先生の話
 で聞くだけのもの、その実物がくろ
 さらにはグライダーも飛ぶというニ
 ュースはまさに驚きであり、誘い合
 った数キロの山道を歩いて見物に押
 しかけたものだった。

グライダーは有名な飛行士、吉原
 清治(報知新聞航空部)、機材は吾
 野の丸共運送木下氏の青年自動車で
 搬入され、飛行は地元青野の応接
 によるゴム牽離陸方式だったと聞くが
 どの程度の飛行であつたか確かな記憶
 はない。

「スキー、スケートは何時頃から
 日本に入ってきたのだろうか」

雪国北欧やアジア北部地方では、神話にも登場する交通具としてのスキーは「輪漕(わかんじき)や橇から発達したもので、日本へは高田の五十八連隊でオーストリアのレヒト少佐の指導した大正十三年一月が最初と言われ、続いて旭川の連隊でも指導された。別途札幌農学校ではハンス、クラーク教授による導入も記録されている。スキー教授による普及され、冬季オリンピックには第二回(一九二八年)、第三回(一九三二年)にスキー、スケート連盟の参加があった。飯能河原のスケート場については戦前から各乗川の堰止め部分の利用、川の家、水泳プールにスケート場としての経営者の変遷もあり、その年代は定かでないが前後もかなり長く昭和三十年代まで続いたものと思われる。なお、都幾川上流に現在も営業する「上サスケート創業」は戦後昭和二十二年村営として創業したもので、冬季の河温に恵まれた地形、都幾川上流の河川敷にビニール敷き水張りタイプで、特に平成二十年の低温は極めて好条件、四十日以上営業、来客を見たという。恐らく県下唯一の天然スケート場と思われる。

飛行として欧亜連絡飛行で大記録を樹立した。その記録は全飛行距離一四〇四キロメートル、全飛行時間七九時間五十八分、(昭和五年八月二十日、ベルリン(八月三十日東京)だった。その後はグライダー界を主として、初代気象台長の藤原咲平氏を中心とした霧ヶ峰空研会のメンバーとして、特に筑波での(昭和十年五月)一時間を越える滞空記録を樹立以後同志とグライダーの試作製造等に携わったと言われる。スキー場に來たのは恐らくこの頃であつたろう。

都幾川関連の人としてもう一人忘れてならないのは、旧平村出身の岩田正夫飛行士。大正十五年八月、立川飛行学校在学中の郷土訪問飛行で不時着し、その機体は慈光寺の飛行機小屋に保管されていたが有名な古典機として現在所沢航空発祥記念館の後日本電報通信社(現在の電通)の所屬となり、昭和三年、昭和天皇即位大典記録写真搬送中の遭難で伊勢湾沖に死亡している。所沢展示のニューポール機及び霧ヶ峰式グライダー等は常設展示であり関心ある方の見学をお奨めしたい。

(参考文献)

飯能、都幾川市及び村史資料編
日本航空史、グライダー史
気象庁年間積雪データ
なお飯能及びとき川町生涯学習課の方々にご教示戴いたこと、お礼申し上げます。

(会員)

浅草観音の生地 岩井堂
入子助蔵

飯能岩淵の青梅つながなる街道沿いに、成木川を背にして立つ石碑がある。石碑建立から早四〇数年。当時の賑わいを厳かに秘めた文面に注目してみよう

岩井堂観音略縁起

浅草寺観音の發生岩井堂観音はその昔維新天皇の御代 一人旅僧龍澤に靈跡 奇蹟を感得し 尊像を安置せしと伝う 安閑天皇の御代大暴風雨百雷もろとも鳴り見るまに堂宇尊像崖下に押し流されその行方をしらず後一〇〇年後推古天皇の三六年隅田川にて三人の漁夫の網にかかり金色燦然たる尊像 これまさしくありし日の岩井堂観音なり 郷人これを聞きその返還を求むれどそのかいなく改めて尊像を刻しこれを祀る。たまたま運ば伝えたる今の浅草寺管長清水谷大僧正は未善龍院より尊像を奉還して古の郷人の志をつがれ永久にその奇縁を新たにせられた。

今堂宇新築にあたり略してしるす。

中僧正円照寺住職 兎玉政雄

岩淵には一三〇〇年以上続いた口碑伝承があった。およそ一四〇〇余年前一人の旅僧が、木彫金泥の観音像を携えここに靈験を得てお堂を建て仏像を安置し、修行したのが岩井堂の興りであると言う。後に大暴風風に遭遇し、崖下の成木川にお堂もろとも共に崖落し尊像を失ってしまった。その後、浅草浦で漁師の網にかかり 駒形の地に引上げられた仏像が、岩井堂観音であるとして、地元民は返還の申し出をした。この願いは通わず岩井堂は新しい尊像を祀った。その後勝海上人により、引上げられた仏像は、浅草寺建立と共に秘仏として制定され浅草観音となつた。

たとえ贋首といえどもそのお姿を拝する事はならないと言ひ嚴重な掟に守られて、今日に至っている。岩淵の口碑伝承に注目された、後の二四代貫首清水谷恭順師がこの地に再三赴かれ調査研究された。この伝承について、浅草寺誌に記録されている事など歴史上の事実を踏まえて、終に勇氣ある決断をされた。昭和八年、浅草観音生誕の地が岩淵岩井堂であるとして、浅草観音の御分身である尊い聖観音像を奉還下ると言う有難いお申し出に、地元は湧いた。現在の古老の中には、当時の入佛式の様子を記憶している人もあると聞く。

同年、清水谷恭順師は浅草寺本堂の大修復、駒形堂の再建に続き岩井堂再建にも尽力下さつた。



同年、清水谷恭順師は浅草寺本堂の大修復、駒形堂の再建に続き、岩井堂再建にも尽力下さった。現在の岩井堂は、当時清水谷師の深いご配慮により、浅草からご手配下された職方により、駒形堂と同様の屋根瓦にて完成した。この事は、駒形堂と岩井堂を結ぶ深い縁の証として意義あることです。その上、岩井堂を



浅草寺の奥の院にしたいというご意向も伝えられたが、堂主岩崎家の事情で、計画は成らなかったが入佛式以後も度々当地を訪ねて下さった。この浅草観音の生地である岩井堂を郷土の誇りとして、我々は未永く子孫に伝え守って行かなければならないと思う。

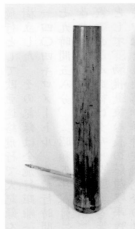
(埼玉県郷土研究会会員)

古飯能焼と陶工としての
「イッタン」描きの検証

岸 道生

私が飯能焼を再興しようとした頃、飯能焼はただ漠然と筒描きと言われていた。窯を聞いて五年、六年経った頃、筒描きを再現しようとして竹を切り写真の道具を作った。しかし、竹筒に入れた泥を出す

力は一気圧であるため、かなり流動性を持たせなくてはならない。古飯能焼の線は細くして盛り上がりについている。それで道具は何を使用したのか

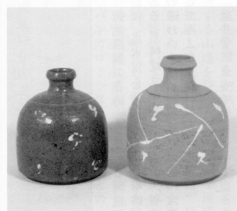


考え始めた。隆盛をする道具には、次に挙げるものがあり長所短所を調べることにした。

○筒書き

「こうした隆盛の線描きのものでして丹波立杭焼の筒描き」というのがある。「かっぱ」が竹筒（たけぼんぼん）に代わったものです。立杭焼に用いる竹筒は直径七センチメートルぐらいの竹筒の一節を二十から三十センチメートルの長さに切り、節を底にしてその胴に細い竹筒を斜めに差し込んだ竹筒を作り、これに化粧泥を入れ描くもの。竹筒の角度によって泥の出かたが異なる。この技法を使った産地は、青森県の悪土焼九州の小石原などかつて全国にありました。『陶芸の伝統的技法』大西政太郎著 理工学社より

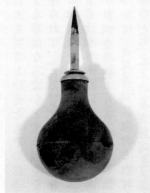
古飯能焼の線を描くために化粧泥の水分を少なくしなければならぬ。実際竹筒で描いて焼いたが、線を細くする



くすると厚みが薄く消えてしまった。右が素焼きに筒描きをしたもので、左が本焼をして線が消えなかった。通常は化粧泥を出す口には口金は付いていない。他の窯では、古飯能焼の割合に大きなものが多い。そして化粧泥は止めにきいたため一筆描きのように連続して描かなければならない。濃くすると口から出なくなってしまう。竹筒で古飯能焼の細い線を出すのは無理だということが分かった。

○スポイト描き

現在では、ほとんどゴムのスポイトを使用している。スポイトを手で握り力の調整により化粧泥を自由にしたり止めたりする事が出来る。



○「イッタン」とは

一般に「かっぱ」と呼ばれる繊維の強い和紙に稀液を引いたものを円錐の筒にし、その先に真鍮製の細い口金を付けたものでその中に化粧泥を入れて、指で搾り出しながら、隆盛の線文様を描く。この技法を「イッタン描き」という。

この技法は染物に使われているも

ので、友禪に關係していた久隅守影、別名「一陳斎」という人が、古九谷の絵付けの仕事に、この友禪の線糊の技法を応用したことから「イチッテン」という言葉が生まれたといわれている。『陶芸の伝統的技法』「かっぱ」とは両合羽のことで、和紙に柿渋を塗りその上から荏胡麻油を塗り防水性を持たせたものでこの両合羽の雨を取り「かっぱ」と言われているという説もある。早速、東京の染色材料を扱っている店を探しかっぱと口金を購入し使ってみる。すると泥の濃度が濃くても圧力の調整がつき、古飯能焼の線と同じ線になった。これに間違いないと思い「かっぱ」を使ったイチッテン描きであると断定した。最近の原窯の発掘調査でかっぱの口金が発見された。これを京都の職人が復元した。



復元したかっぱの写真

ただしこの欠点は、化粧泥がオリオンや珪石などを水で溶いても泥と水が分離し易く和紙の繊維の目から水が浸透して出てしまい、

すぐに化粧泥が固まり口金から出なくなってしまう。この状態を解決するために糊を入れることも考えたが、夏などは腐敗してしまうため考え直す。古飯能焼（原窯）には、イチッテン描きをした上に釉薬を掛けずに焼き上げたものが発掘されていることを思い出した。焼け締まる化粧泥を使用しないとすぐに剝離してしまう。白い粘土（磁器土または半磁器土）のものを使えば良いのではと思い、在庫の半磁器土を使用してみた。この結果水が濡れやすい一番の難点が解決できた。以上により「イチッテン描き」といった場合は、「このかっぱで描いたものである」と思いう。今後も発掘資料を参考にして再現していく予定である。

（会員）



古飯能焼「原窯」の再現品



（随筆）
十三夜
大野悦子

今年（平成十九年）は十月二十三日が十三夜であった。ちようど植木屋さんの庭の手入れが終わったばかりで、整った木の姿を十三夜の月が照らして神秘的な雰囲気をかもしだしていた。
亡き姑は一月の七草からはじまって恵比寿講、節分、雛祭り、端午の節句、七夕、十五夜、十三夜など、日本に昔から伝わる伝統行事をしつかりとやっていた。
十五夜をしたら必ず十三夜をしなければ、「カタミ月」になるからいけないと姑は執拗に毎年私に言っていた。十五夜には小芋、十三夜には八つ頭を供えるとすも言われた。お月見でも総ての支度を朝からはじめて、お昼前から飾ってしまいうほどのせつちかだった。

八十歳を越えたころから徐々にそれらの行事が私がやるようになっていった。私に代わってからもない頃、十三夜が私の読書会の日に当たっていた。だいたい準備はしたが飾るのは帰ってきてからと思つて家を出た。

十月もなほ過ぎると日が短くなって四時ごろはうす暗くなってくる。車の中に用意しておいた花瓶に、途中で取ったススキとこの、案の定「カタミ月」になりはしないかと、ひやひやいらいらした姑が待っていた。
雲ひとつない十三夜の月を庭に出て見ながらそんな事を思い出した。

明治の女性の頑固さを持つ姑であったが家を守り伝えるには、あれで良いのかも知れない。息子も娘も姑から言われた事は強烈に覚えている。特に娘は押し付けられることに、かなり反抗的であったが、結婚してから老齢の人たちと交わりが言つていた事や所作が、頭に焼き付いているから今になって役に立っていると言っく。
思えば私も彼岸明けの土産団子などかならず供えている。今のところ私には姑のように頑固には出でておくのも一つの方法かも知れないと思つている。

（会員）

若山牧水の歌碑

天覧山のおもと、飯能市郷土館入口に「牧水の歌碑」がある。大正九年、牧水三十九歳の時、秩父より飯能に旅し、その折の『くろ土』所載

「秩父の春」の中の歌である。昭和三年、酒と旅の歌人牧水は、四十四歳の若さで没し、それから三十三年のち、喜志子夫人の筆によって刻まれたものである。昭和三十六年五月飯能市観光協会建立



しらじらと流れて遠き杉山の峡のあき瀬に河鹿鳴くなり(喜志子書)

飯能郷土史研究会の活動

◎平成十九年度事業報告
▽総会 四月二十一日(土)
講演会

「民俗からみた飯能」
いくらし・うた・芸能

講師 小野寺節子氏

(国学院大学講師)

▽例会
(飯能市文化財保護審議委員)

▽例会

●六月二十三日(土)
「飯能の幕末」

講師 浅見徳男氏

(飯能市文化財保護審議委員)

(埼玉県郷土研究会会長)

●八月二十一日(水)

甲府周辺の見学会

●十月

特展「西川林業道具展」

郷土館事業に協賛

●十二月十五日(土)

私の「歴史観」

講師 吉田 靖氏

(副会長)

●平成二十年二月十六日(土)

「岩井堂観音と浅草・浅草寺」

講師 入子助蔵氏

(埼玉県郷土研究会会長)

●三月三十一日

郷土はんのう二十八号発行

◎平成二十年年度事業計画
▽総会 四月二十日(日)
講演会

「高麗郡建郡千三百年と高麗氏」

講師 高麗文康氏(高麗神社宮司)

▽例会

●六月二十一日(土)

「飯能の民謡と童謡」

講師 深堀道義氏(作曲家)

●八月

見学会

●十月十八日(土)

岩井堂観音の見学会

案内 入子助蔵氏(埼玉県郷土研究会会長)

●十月

特展「名栗の歴史」

郷土館事業に協賛

●十二月二十一日(土)

講師

●平成二十一年二月二十一日(土)

講師

●三月三十一日

郷土はんのう二十九号発行

郷土はんのう 第二十八号
発行日

平成二十年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒357-0121 飯能市中藤上郷四一三

(岸道生方)

電話 九七七一〇六五四

題字 大野邦弘

印刷所 (有)ビィ・ユースフル